

Ⅱ James M. Stayer教授（クイーンズ大学、カナダ）の短期招請について

政治経済学部教授 倉 塚 平

カナダのオンタリオ州キングストンにあるクイーンズ大学史学部教授ジェームズ・M・ステヤー博士は、1958年ヴァージニア大学でM. A（歴史学）、1964年にコーネル大学でPh. D（歴史学）を取得した。その間、彼はドイツのフライブルク大学でドイツ政府奨学金D A A Dを得て、宗教改革期に各地に出現したカトリックとプロテスタントの諸侯により異端として徹底的に弾圧された宗教改革急進派の研究に励み、またバックネル大学のアシスタント・プロフェッサー時代、1967～68年、ドイツのミュンスター大学でアレキサンダー・フォン・フンボルト財団の奨学金を得て、さらに宗教改革急進派ことにその中でも1534～35年に起ったミュンスター再洗礼派の黙示録的千年闘争運動について研究していた。ちょうど氏の本学招請者である倉塚も、同じテーマで同財団奨学金を得てこの時期ミュンスターに学び、両者の親交はこの時から始まる。

1972年 ステヤー氏は“Anabaptists and Sword”という著作を世に送ったが、これは宗教改革運動の最只中で発生した諸再洗礼派は現世拒否的な点では一致するが、従来いわれているように権力の迫害に対して絶対無抵抗の殉教主義者ばかりではないことを明らかにしたもので、この領域の研究では新しいパラダイムを開くものであった。倉塚はそれゆえ雑誌『思想』（岩波書店）1973年7月号（通巻589号）にその書評を掲載した。それは一つには現世肯定か現世拒否か、二つには自己の信仰を政治的手段をもって実現しうべきか否か、という二つの基軸の上に、再洗礼派のみならずルター派やツヴィングリ派がどう位置づけられうるかを鳥瞰図化したものであった。彼はこの書評を大いに喜び、再版序論では、諸々の批判に対して、私の鳥瞰図をもって答えていた。

約20年後、偶然にも二人は再びハイデルベルグで出会い、部屋も隣り合い、朝夕顔をあわせ、時恰もベルリンの壁崩壊の時に遭遇し、興奮して語りあったものである。七カ月のこの密接な校友の後、再会を誓い合って別れたが、幸いにも本学国際交流基金事業外国人学識者招請計画によって、1995年10～11月、氏の来日が実現したことは、まことによろこばしいことであり、同計画に厚く感謝申し上げたい。

ドイツのメノナイト歴史協会編“Mennonitische Geschichtsblätter, 52Jg. 1995”は、ステャー氏誕生60年を記念して特集を組み、次のように讃辞を贈った。「ステャーは過去二十年間にわたり再洗礼派研究に深い影響を与えつづけてきた。そしてわれわれに再洗礼派の新しい像を見開かせてくれた。かくしてドイツにおいてもよく知られた人物となった。実際、彼の筆から溢れてくるおびただしい論文は、いちばんよくこの分野の研究が行われているアメリカやドイツの研究者につねにショックを与えるほどのものであった。」確かに。先に述べてきたような氏の再洗礼諸派の多様な権力観の析出は、20世紀中葉まで支配的であったアメリカ・メノナイト派歴史家たちの共通認識——イエスの弟子たらんとして「山上の説教」を文字通り実践せんとしたために、お上の権力によって処刑された殉教者観——を徹底的に打破るものとなったが、それから約20年後自己の研究を集大成した“The German Peasant’s War and Anabaptist Community of Goods” 1991では、再洗礼派は1525年のドイツ農民戦争の中から生まれ、その刻印を強く押されていることを資料操作から見事に究明したことにある。これまでの研究では、再洗礼派の非暴力無抵抗主義と武装蜂起した農民戦争とは全く無関係とみなされていた。だが氏はドイツ農民戦争の主たる要求の一つである十分の一税廃止をいちやく掲げて弾圧されたのは、チューリッヒから初めて出現した再洗礼派の集団たるスイス兄弟団の青年たちであり、農民戦争がやがて勃発すると彼らはそれに深くコミットし、各地に伝播していったこと、さらにこの派の影響下にあったヴィティコン村では農民戦争中、財産共有制を実施したが、それがやがてモラヴィアに亡命したフッター派の財産共

有制にも影響を与えていることなどを明らかにした。要するに再洗礼諸派をふくむ宗教改革急進派はドイツ農民戦争の一環として把握してのみ、その思想と行動の脈絡を理解しようという新たなパラダイムを提示したのである。

ところで来日に当っては、宗教改革急進派の他の一つの源泉となったトーマス・ミュンツァーに関する未発表の新研究をわが国の宗教改革研究者たちに提示し、熱烈な議論を呼んだ（11月4日）。それは“Reeling History Backwards: the Anabaptists as a Key to Understanding Thomas Müntzer More Conservatively”と題する論文である。以下それを簡単に要約しよう。

ミュニツァー評価は時代状況によって変転しつづけてきた。1849年三月革命に参加したW・ツインマーマンは、ドイツにおける革命的伝統を発掘するため1525年の農民戦争に遡り、そこに革命の神学者ミュンツァーを見出した。だが彼はミュンツァーのキー概念である聖霊 Geistを、弁証法的論理をもって自己展開していく青年ヘーゲル派的な「精神」と同一化して捉えてしまった。それをひきついだエンゲルスは、「ミュンツァーの信仰は無神論に接近している。神学の言葉を用いて革命思想を喧伝したのだ」と主張した。ワイマール期、1932年、超保守的神学者カール・ホルはルターと対比してミュンツァーを描き、評価の基準も設定せずに「ルターに次ぐすぐれた神学者であった」という。第二次大戦後は東独ではスターリン賞をもらったスミーリンのミュンツァー伝から研究は始まる。その後ここでの研究は多少のバラエティはあれ、エンゲルス・テーゼの金縛りにあっていた。西ドイツでは一匹狼のマルクス主義哲学者エルンスト・ブロッホが「革命の神学者」ミュンツァーへの思弁的なアプローチを繰返していた。逆にT・ニッパダイは彼をルター主義神学を特異な形で修正した原全体主義的革命神学者として捉えた。

これに対してH・J・ゲルツは“Innere und äussere Ordnung in der Theologie Thomas Müntzers”（1967）によって、彼の神学を中世的な苦難の神秘主義の伝統に立つものとして捉える。すなわち、神の霊は人々を救済するためには、彼らの魂の

深淵に働きかけて被造物崇拜心を徹底的に浄化することを求める。これに応えることは恐るべき苦しみを生み出すことになる（内なる神の創造の秩序）。だがこの苦しみに耐え魂を浄化した者たちは同じ論理で人の手になる外なる被造物秩序を根底から破壊し、神の創造の秩序を回復しなければならない。かかる意味で、彼の神秘主義的救済論は彼が農民戦争に参加したと密接に関係するのであり、その限りで「革命の神学者」なのであるという。やがて1989年ゲルツのミュンツァー伝が著わされるに及んで、それは高度のコンセンサスを獲得するに至った。他方、東ドイツの「正統派」研究者たちは、ベルリンの壁が崩れるとともにいっせいに沈黙した。世にはミュンツァーなど革命家でもないし、ましてや神学者などという者ではないという風潮が拡まった。この中にあってG. フォーグラーは、ゲルツのいう「革命の神学」という主張はあまりにも近代的に捉えすぎている、また様々な矛盾的要因をはらみ、いずれも情況的発言であったミュンツァーのディスクールを、ゲルツはあまりにも緻密な一つの神学システムにまとめあげていると批判する。

以上のような研究史の導入から始まり、ステャーはゲルツに対して批判のパンチを加えていく。まず第一に、ミュンツァーは政府をふくめてこの世の被造物秩序を根底から変革しようとする革命家ではなかった。他の急進派の改革者と同じく彼もまたアルシュテットという小さなチューリングゲンの町の改革者であり、ついで追放されてからは帝国都市ミュールハウゼンの宗教改革を必死で守ろうとして農民戦争に巻きこまれたのであって、背神の徒の血の海の中に大地を浸そうというような神的使命をもった狂信者ではなかった。第二に、ゲルツはミュンツァーの黙示録的終末期待のゆえに彼を革命の神学者として評価しすぎている。なぜなら、16世紀のほとんどの人々は、ミュンツァーに限らずそれぞれの立場の違いこそあれ、終末の日を様々な著書から借りてきた幻想をもって描きあげていた。その日こそが彼らが救われ、敵手たちが罰せられる希望成就の日であると信じていたからである。ちょうどミュンスターの市民的急進派がその市の宗教改革を脅かされそうになると、メルヒオール・ホフマンが唱える1533年末を主の再臨の日と信じて千年王国主義へと

突入した如くである。第三にゲルツは、フォーグラールが指摘するように、ミュンツァーをあまりにも体系化して捉えすぎている。だがルターについてもいえることだが、これまで思想史家たちは、宗教改革者たちをあまりにもまとまった思想体系の保持者であり、彼らの行動はその体系的思想の具体化であるとしすぎている。実際、ゲルツの描くミュンツァーの中世神秘主義的な苦難の神義論と彼のお上への抵抗と黙示録の終末期待とは決して一個のまとまった体系ではなく、個々バラバラなものであり、敢て無理な折衷によってまとめあげられたものにほかならない。大方の支持を得た瞬間、解体に向けて進みだした理由もここにあるといえよう。

ではステューアーはミュンツァーをどのように捉えるのであろうか。セバスチャン・フランクが『歴史聖書』（1531）の中で、「もしミュンツァーが生きのびていたら再洗礼派になっていたであろう」といっているように、彼が影響を与えたハンス・フート派の立場からアプローチするのがいちばん適切だという。フートは『被造物の福音』を書くが、「神の創造の秩序は万物が他者に奉仕する体系をなしている。例えば、羊が生きる目的はやがて人に皮を剥かれ肉を食されることにあるように、人は自己を放棄し、己を殉教者としてイエス・キリストに奉げなければならない。最後の審判の日、主の前に召し出されるこれらの人との盟約の印こそ洗礼である」という。まさしくトマス的目的論的ともいえるこの階層的な世界秩序観こそが、ミュンツァーの苦難の救済論の思考の枠組をなしているといえないであろうか。*omnia sunt communia*（すべてのものは共有である）という使徒行伝から借りてきたミュンツァーの農民戦争で発した言葉も苦難の救済論から生じる一掃結であった。スイス兄弟団とフート派らの影響を受けて成立したフッター派再洗礼派はモロヴィアに逃れて文字通りの共産主義共同体をつくりあげる。それは徹底した受難と自己放棄の体系であった。「ミュンツァーの歴史的意義はこれだけあり、これに止まる」とステューアーは宣言する。

以上の報告は、14人のわが国の宗教改革史研究者の興味を強くひいたし、反比例としてわが国におけるミュンツァー研究家田中真造・藤井潤両氏（ともにゲルツの

ミュンツァー伝を翻訳上梓している）が激しい反批判を加え、興味ある論争が展開された。残念ながら、紙数の都合上それを紹介することはできない。なおステューアー氏は、倉塚が行っている政治学説史の講義で二度にわたり宗教改革史に関する現代に即した興味ある講演を行ったことも附記しておきたい。